

女三宮の世界について

—「若菜」巻における贈答歌場面を中心に—

武原弘

女三宮の六条院への降嫁および柏木との密通の事件は、それまで源氏と紫上の理想の一对をその頂点として栄華を極めていた六条院世界を激しく震撼し、さらにその内部崩壊へと導くものであった。「若菜」上巻にはじまるそのような悲劇世界は、これまでの

「源氏物語」世界とはまったく異質の、新たな文体による新たな主題の提起を意味するので、すでに諸先学によってすぐれた論考が重ねられてきており、問題は論じ尽くされていると言ってもよいが、管見に従うならば、従来の諸論には、女三宮の内面世界に関わつての考察、換言すると、女三宮の主体の内側から六条院の世界像を見取ることを通しての悲劇世界の把握という考究視座は、あまり顧慮されていないように思われる。実際、密通後の女三宮の内面的不安や苦悩に関する叙述は作中に多見されるが、それ以前の彼女の心情や心理を表現する叙述はあまりにも少い。それが、女三宮像型上の物語必然であることも認められるとしても、物語前半における女三宮の内面世界が可能な限り追究されることによって、他方には分厚

女三宮の世界について —「若菜」巻における贈答歌場面を中心に—

く精叙される紫上の内面悲劇もよりいっそう鮮明となり、「若菜」巻における悲劇世界の本質が、より確かに解明されるはずではないだろうか。以下は、上述のごとき視座による、私のささやかな試論である。

二

鐘愛の女三宮を源氏に降嫁せしめた朱雀院の判断が錯誤であったか否かはともかくとして、六条院に迎え入れられた宮の、あまりに幼稚なその人柄の問題から考察をはじめよう。「姫宮は、げにまたいと小さく片なりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひたみちに若びたまへり」（「若菜上」(4)五六頁)、「女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、(中略)みづからは何心もなくものはかなき御ほどにて、御衣がちに、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ児の面嫌ひせぬ心地して(下略)」（同、六六頁）などの叙述によって、宮の肉体や容貌のみならず、その態度や性質にも及ぶ幼稚さが強調されている。

このように幼い女三宮に対する六条院の人々の反応に、いま、注

意したい。まず、源氏は「などでかくおいらかに生ほしたてたまひけん」（同、六七頁）と朱雀院の教育を批判したあとで、「なま口惜し」く、昔の自分だったら裏切られた感じになるだろうと、深い失望感を抱く（同）。が、宮の身分を考え、また朱雀院への対面からも、これを大切に扱うのである。そして、宮に対する失望感は、反動的に、紫上に対する強い愛情を源氏におぼえさせることになる。「一夜のほど、朝の間も恋しくおぼつかなく、いとどしき御心ざしのまさる」（同）源氏なのであった。

他方、紫上はどうか。もとより、女三宮の突然の六条院降嫁は、紫上にとって甚大な衝撃ではあった。高貴な宮との身分の格差はいかんともし難く、正妻格の地位を譲り渡さなくてはならない。このような状態にある紫上にとって、唯一の支えは源氏の深い愛情であるが、それともいつまで頼みにできるのか、その保証はどこにもない。

目に近く移ればかはる世の中を行くすとほくたのみけるかな
(同、五八頁)

さりげない手習いの歌に、紫上の深い苦悩と不安とが刻みこまれていたのである。ただ、女三宮にはじめて対面して、宮の幼い様子に接した紫上は、ひとまず安心を得ることができた。「いと幼げにのみ見えたまへば心やすくて」（八三頁）、紫上は、宮を対抗者としてではなく、むしろ優位の立場から、庇護すべき子どもとして見ている。この対面以来、紫上と女三宮の円満な関係が保たれ、六条院の平和と秩序も保持されることになる。されば、女三宮の幼稚な人柄は、六条院の平和維持のために必須のものであったと考えることも

できよう。

しかし、女三宮の幼さに由来する紫上の安心、六条院の平穩が、いかに非本質的欺瞞的なものであるかは言うをまたない。紫上にとって、地すべりに向かう客観的状況はいささかも変化していないのみならず、宮の幼さはやがて成長に転化する可能態でもあろうからである。明石女御の若宮誕生、女三宮の二品昇格など、「年月にそへて方々にまさりたまふ御おぼえ」（「若菜」下、同一六九頁）は、徐々にはあるが確実に、紫上の降下の現実を浮き彫りする。彼女は、そうした己が現実を直視し、深い不安と苦悩にさいなまれる。

「あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな」（同）と思念する紫上の心底には、いま、源氏に対するぬきがたい不信感が根づいていると評することができる。「なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ」（同）——きびしい自己抑制によってかろうじて堪える紫上に内攻してやまない憂愁と苦悩が、やがて六条院の表層の榮華を装うための女樂を了えてすぐ発病に至るといふのは、われわれに読みやすい悲劇の道筋と言わなくてはならない。二条院に移されて重態をくり返す紫上、そのかたわらで途方にくれて嘆くほかを知らない源氏とは、とりもなおさず六条院の暗転を語り告げるもので、その間隙に生起するもう一つの悲劇については、後述にゆずりたい。

さて、以上のように紫上の苦悩と悲劇の世界をたどってみて、私にはあらためて吟味を要すると考えられる一つの問題点が残る。紫上の苦悩が女三宮の降嫁に因由しているのは確かなところとして、宮の幼稚な人柄は対抗者たり得ないものであることを知り、また、

爾来かえって増大した源氏の愛情によって、六条院における彼女の
実質的優位は保たれていたにもかかわらず、内界において深刻化の
一途をたどり、ひいては源氏に対する深い断絶、不信の感情へと昂
進する紫上の苦悩の本質とはなにか。それは、不安定な自身の地位
そのものよりも、それを支えているはずの源氏の愛情それをこそ根
底から問いなおし、それによって逆照射される己が「宿世」の憂苦
を見つめなおすことの謂ではなかったか。「人よりことなる宿世も
ありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れ
ぬ身にてややみんとする」(同、二〇三頁) という紫上の憂愁
は、己れの生を深く根源にまでさかのぼって凝視する精神の営みに
発したものであると言えよう。そして重要なのは、このような紫上
の苦悩が、あくまでも幼い女三宮によってもたらされることの意味
である。紫上の苦悩が、女三宮の幼さからの問いとしてあるのだと
するならば、物語においてそれはいかにして生成発展するものであ
るのか。論点をふたたび女三宮その人に戻して、考察を進めてみる
ことにする。

三

知られているように、「若菜」上巻以降、物語は人物による和歌
の贈答唱和の場面を著しく減少させる。その描写は、かつて今井源
衛氏が述べられたごとく、「抒情を極度におし殺した息の長い説得
的な散文」「客観的で周到丹念な叙述」文体を基調とするものなの
である。が、その故にこそ逆に、数少い唱和の場面は生きたものと
なり、その表現性はより豊かなものとなつて見るともでき

女三宮の世界について — 「若菜」巻における贈答歌場面を中心に —

よう。

女三宮が六条院に降嫁してすぐの三日間、源氏は夜離れなく宮に
通う。平静を装いつつも、悶々として孤閨を守る紫上のことを思い
やつて、源氏はまだ夜深い時刻に母屋を出る。夜明け近い暁の空に
かすかな雪明りを見ながら帰った源氏は、そのまま紫上のもとで日
を暮らし、五日目の朝、ようやく宮への後朝の歌を贈る。

中道をへだつるほどはなけれども心みだるるけさのあは雪

(「若菜」上、(4)六四頁)

幼稚な宮からの返歌は、しばらく時をおいた後であった。

はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪

(同、六五頁)

案じられたとおり、「御手、げにいと若く幼げ」で、紫上の目にも
「さばかりのほどになりぬる人はいとかくおはせぬものを」(同)
と映った。宮の幼さを強調する叙述である。

ところで、右の宮の詠歌はそれほど幼く、稚拙と言うべきであら
うか。この歌は、「源の夜がれをうらみたる」^(註)ものには違いないが、
「片生ひ」のまま六条院に降嫁して間もない宮が、ただ一人頼るべ
き天源氏の訪れを見なくなったさみしさ、心細さの心情を哀感豊か
に詠出しているのである。下旬の「風にただよふ春のあは雪」は、
源氏の贈歌の「心みだるるけさのあは雪」に対応させた表現で、贈
答歌のルールになつており、しかも歌意の上で、はかなく不安な
宮の身の上を暗示して効果的な形象である。歌の基調として、源氏
が踏まえた古歌

かつきえて空にみだるるあわ雪は物思ふ人の心なりけり

藤原かげもと（後撰集卷八、冬）

を重ねて踏まれる宮の詠歌技法も、高度と評されてよい。「岷江入楚」は、この歌について「めのとのよめるなるべし」との注解を施しているが、物語本文にそれを証するに足る叙述を見出すことはできないので、私見では従いがたい。むしろ、外見の幼稚さをほめるかに凌駕する宮の内面心情の豊かさ、詠歌技法の確かさを読みとるのが妥当なのではないだろうか。

ここで私がとくに重要だと思うのは、歌意のいかんを問うこと以上に、源氏と女三宮との間にこのような贈答歌の成立を可能ならしめていたその基盤について省察を深めることである。かつて、時枝誠記氏が高論されたごとく、「源氏物語の中では、二人の人物が相対して、感情が高潮して来た場合、多くの場合、それら両者の感情、意志といふやうなものは和歌の形で表白され、交換される」のであるからには、いまは手紙の形式によって、源氏と女三宮とは互いに切実な愛の感情を共有しようと、求めあい、詠みあっているのである。あるいはまた、清水文雄氏のすぐれた論考に示唆されているごとく、平安朝貴族社会におけることばの生活——対詠の実態として、「一対一の相対で贈答歌が詠みつけられるためには、（中略）連帯性の意識を共通の心理基盤とし、対詠当事者のあいだの才藻の均衡ということとを条件とする、通じ合いの「場」が成り立っていないなくてはならない」ことを願て、こうした条件を充足してこそ成り立った源氏と宮の贈答歌にあらためて注意を払わなくてはならないのである。すなわち、ここでの二人は、表層において新婚早々のと絶えの言いわけや、それによる孤独の嘆きやを贈答しており、内

実において、愛を求めて高揚する共通の心情を切実に詠み交わしている」と評されるにふさわしく、とりわけ宮の内界における不安の感情表白は、形象鮮やかと読み味わえよう。その日、源氏はまた宮のもとにたち戻らなくてはならなかった。

しかし、ここだけに突出して鮮明な宮の内面心情について、以降の物語は何ほどの描写をさへ施そうとしない。前にも見てきたごとく、宮のあまりの幼稚さに源氏は失望し、愛情の交流場面は失われてしまふ。そうした物語の文脈をつぶさに辿るならば、野村精一氏による端的な発問——「女三宮は、光源氏を愛したのだろうか？ いや、光源氏こそ、女三宮を愛したことがあったのだろうか——？」に對する答えは、ほとんど自明的と考えることもできる。武者小路辰子氏が論述されるごとく、「愛なく庇護のみを要求する女三の宮」は、「きぬぎぬの別れも、夕べに見出して送る場も構成することがない」「その幼稚性をもって源氏の理想性を失わせる」人物と見なされて当然とも読まれるからである。が、にもかかわらず、既述の贈答歌場面における宮の切なる内面心情について考及されない武者小路氏の見解には、私は全面的には首肯しがたいのである。氏がが述べられるごとく、「女三の宮の幼稚性が、理想像（源氏の「引用者注」）を正當に評価し得ないので」「光源氏が、その魅力を消失」するのも確かなものではあるが、見方を逆にすれば、源氏が宮のそうした幼稚な人柄に可憐の美質を見とる力を失い、「好色」心の発動を鈍らせていると考えても、けっして不当な読みではないのである。かつて、藤壺のゆかりである少女紫上を垣間見た源氏は、これ幼さに比類のない「うつくし」「らうたし」の美質を見出し、これ

を愛した。いま、同じ紫のゆかりの幼い女三宮に対して、源氏はそのような魅力をまったく感じとっていないのはなぜか。初期の紫上物語に採った童女養育譚と同趣の話をここで反復するのを回避しようとする作者の意図によるころもあるが、いま状況論にかかわる視座から考えると、問題はむしろ源氏の側にあると言えよう。

一見、ささいな事がらではあろうが、さきの贈答歌の場面において、源氏は宮の返歌を広げ、紫上にも見せている。紫上に隔てを感じさせまいとする源氏の配慮である。そのときの幼稚な宮の筆跡に対する紫上の反応については、さきにも触れた。ここで、紫上は歌の内容やそれにこめられている宮の心情について一顧だにせず、「見ぬやうに紛らはしてやみたまひぬ」（「若菜」上、(4)六五〇六頁）との態度を示すのは、私にとつて、読み過ごせない要点の一つである。紫上は、源氏の愛を求めて切実に訴える宮の魂の世界をそこに見ながら、これを無視することによって逆に彼女を支配し、心理上の優位を得ようとしているのであるが、内心においては二人に対する募る嫉妬、不信の思いを必死に抑制していたはずで、後に語られる彼女の深刻な苦悩や発病がそのことを証するのは、くり返して述べるまでもあるまい。源氏としては、宮の返歌を見せることで、紫上に対する信頼を示し、彼女の嫉妬を封じようとしたのであろうが、事はむしろ逆であつて、前述した意味での贈答歌世界における二人の高揚、連帯を見せられた紫上の心の傷は深いとしなければならぬ。さらにまた、そのような宮との贈答歌世界を紫上にも領有させることによつて、源氏は向後における宮との二人だけの高揚、連帯の場を遠ざけてしまったと言える。贈答歌における愛の世界

女三宮の世界について — 「若菜」巻における贈答歌場面を中心に —

は、本来、第三者の立ち入るべきところではないからである。以後の物語において、源氏と宮との贈答、唱和の場面が失われていく所以である。こうして失われた贈答歌の世界が、女三宮において回復されるのは、はからずも柏木との密通事件によつてであつた。

四

「若菜」上巻の終わり近くで、かねてよりひそかに女三宮を恋慕し続けてきた柏木ことが描かれる。六条院での宮が「対の上の御けはひには、なほ庄されたまひてなん」（「若菜」上、(4)一二八頁）との噂を聞いて、彼の執心はいつそう深まり、「世の中心めなきを、大殿の君もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはば」（同）と思いつめるまでになつた。このような柏木像は、第一部後半の物語に描かれていたものとは異質で、その人間像の姿貌がしばしば問題視されるが、こうした新たな柏木像造型が、後の女三宮密通事件のための作者の準備であることは、一般に認められているところでもある。

ドラマのプロセスを少しくたどつてみよう。春三月のうららかなある日、源氏は無聊を慰めようと、六条院東南の寝殿の東面で、若い貴公子たちを促し、蹴鞠を催す。風もない静かな庭に、桜花が雪のように降り、「乱りがはしく」（同、一三一頁）鞠に身を投げる若者たちにかかる。ここは女三宮の居所近く、気もそぞろの柏木は、蹴鞠の輪から外れて階に腰を下ろし、その方を後目に見る。唐猫が引つけて開けた御簾の内、几帳のそば近くに、桂姿で夕映えに立つ宮の艶姿があつた。「いとうつくしげにて」「いと細くささ

やかにて」「いひ知らずあてにらうたげにて」「いとおいらかにて、若くうつくしの人」(同、一三三頁)を目にした瞬間、これまで柏木の胸中に静かに抱き続けられていた宮への恋情は、炎と燃え立ち、やがては彼の身を焼き滅ぼすことになるのであるが、この場面で、私は、または細部にこだわってみたい。軽率にも端近にいて桂姿を柏木に見られてしまうというのは、幼稚な宮の不注意というほかないが、いま紫上の住む東の対屋から蹴鞠を見物している源氏には、宮のあらわな姿が目に入っていない。柏木のほかにもう一人、夕霧がこれを見とがめ、内心で宮を「軽々し」(同、一三五頁)と軽蔑している。宮を恋慕している柏木と、紫上を思慕する夕霧とは、この場の光景の受けとめ方は自ら相反するが(一三七〜八頁参照)、いづれにしてもここで構成されている場面の全体は、その表層において調和と榮華を誇りつつも、その内部において矛盾と欺瞞に満ちて崩壊に向いつつある六条院の虚構世界を、二人の若者が透視し、侵犯しようとしていることを象徴的に物語っているのではなからうか。源氏自身が見ていない六条院内部の空虚(♀女三宮)を、「乱りははしき」激情(♂柏木)が見定め、撃たんとしている光景と言い換えてもよい。

物語は、激しく募る柏木の恋情を追いながら、そのまま「若菜」下巻に続いていく。やがて、描かれない四か年の経過があり、冷泉帝の讓位のこと、朱雀院の御賀のための盛大な女樂、紫上の突然の発病などについて叙し来たところで、物語は「まことや」(「若菜」下、(4)二〇八頁)の発語を伴って、唐突に柏木を再登場させ、続く密通場面へと急ぎ展開していく。

ここでの密通事件において、また宮の幼稚さがその導因をなしているかに読める。「何心もなく大殿籠りにける」(同、二一四頁)宮に接近し、柏木が胸中の切情を訴え見ると、実際の宮は、意外にも「いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、なつかしうらうたげに、やはやはとのみえたまふ」(同、二一六頁)可憐さで、比類なく美しい。柏木は激しく惑乱し、「さかしく思ひしづむる心もうせて、(中略)わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばや、とまで思ひ乱れぬ」(同、二一七頁)のである。この文脈の解釈として、「宮の人となりは、これまで源氏には難点とみられてきたが、ここでは逆に、柏木の心をゆさぶり吸引していく」との説明(注10)は、まったく至当である。私見によつて言い換えるならば、宮の幼稚さをその美質として愛することができなかった源氏にとつて代つて、柏木が「好色」の行為者となつた。源氏の「好色」の代行者となつた柏木は、当然のごとく、宮において失われているところの贈答歌世界——前節で触れた高揚と連帯の世界を回復することになる。つかの間の逢瀬の後、唱和される後朝の歌。

起きてゆく空も知られぬあぐれにいづくの露のかかる袖なり
と、ひき出でて愁へきこゆれば、出でなむとするにすこし慰めた
まひて、

あぐれの空にうき身は消えたなん夢なりけりと見てもやむべ
く (同、二一九—二〇頁)

「あぐれの空」は、情念の嵐が過ぎ去ろうとしてなお苦しい二人の心象の風景をあらわす。柏木の歌で、「起(お)きて」と「露」は縁語。その「露」を受けて、女三宮の返歌には「消え」の縁語が

導かれ、「夢」と「見ても」の縁語も生かされている。地の文中の「出でなむとするにすこし慰めたまひて」は、帰ろうとする柏木を見てはっと緊張を解く宮の心理を描いたものにはちがいないが、同時に、激情から醒めて後朝の別れを詠歌する柏木の「好色」に感応する宮のささやかな「慰め」を表現するものでもあろう。出て行く柏木の魂は、「はかなげに」「若くをかしげなる」(同)宮の声に引きとめられるがごとくで、かくして、哀情あふれる唱和の世界が成り立ったのである。ただ、宮の詠歌は、またしても不安におののくわが身の上の痛嘆であり、六条院における彼女自身の悲劇をうたう肉声が、そこに聞こえる。

密通後の柏木と女三宮は、それぞれ犯した罪の重さを思い、源氏に対する恐怖感を抱いて苦悩する。「さてもいみじき過ちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれ」(同、二二〇頁)と恐懼する柏木、「ただ今しも人の見聞きついたらむやうにまばゆく恥づかしく思さるれば、明かき所にだにえるざり出でたまはず」(同、二二二頁)懊悩する宮それぞれの内界に深化する苦悩の世界を、物語は克明にたどり描写していく。そして、その過程を通して、女三宮像はより確かな内部造型を獲得し、固有の悲劇世界を生きたる主体者としての存在性を明らかにしてくるのである。宮は、「あやしかりし事を思し嘆きしより、やがて例のさまにもおはせず悩ましく」(同、二三四頁)病気がちであったが、「わりなく思ひあまる」(同)柏木と、なおも夢のような密会を続けていた。見舞いに訪れ来た源氏の前で、彼女は「御心の鬼に、見えたてまつらむも恥づかしうつつましく」(同、二三六頁)思うが、表面を装った

女三宮の世界について — 「若菜」巻における贈答歌場面を中心に —

まま、源氏との日々を過ごす。源氏はまた、二条院に病臥している紫上のことばかり案じて落ちつかず、手紙を書きしきって二、三日後、宮のもとを辞去しようとする、宮からの贈歌がある。

夕露に袖ぬらせとやひぐらしの鳴くを聞く聞きて行くらむ

(同、二三九頁)

宮はさびしいのである。紫上一方のみ傾斜する源氏の愛を喚びもどすべく、宮は低い悲嘆の口調で胸中の切情を訴えた。対する源氏も、「『あな苦しや』とうち嘆きたまふ」(同)ままに、

待つ里もいかが聞くらんかたがたに心さわがすひぐらしのこゑ

(同)

と返歌し、二人の間に一応、連帯性の意識が回復されてはいる。

が、贈歌した宮を、「片なりなる御心にまかせて言ひ出でたまへるもらうたければ」(同)とのみ見る源氏の認識は、皮相と評されるに当たっていよう。女性である宮から先に贈歌するその異例の詠出態度には、その根底に、宮のせつばつまった感情の高潮があったはずで、それをいちはやく見とり、深く感応する「好色」の心を、源氏はいま忘れかけている。この唱和の直前の場面において交わされた二人の会話では、同一の古歌を共通に踏まえての、機知に富んだ応酬が見られ、宮の思惟世界はけっして幼稚なものではなかった。源氏が、そのような宮をその内界にまで深く入って愛することができなかったのは、彼の「好色」世界の破綻であり、ひいては六条院世界そのものの崩壊でもあったのである。

物語は進行し、女三宮の不用意から、柏木の艶書が源氏に発見され、密通の事実が露見する。柏木と宮は、さらに深い恐怖と苦悶の

測につき落とされ、源氏もまた心に深い痛手を負う。三者はそれぞれに、重い悲劇の舞台底を踏みぬいて生きていくことになるが、こゝでもまた、宮の幼稚な人柄が問題視されてくる。宮の幼さは、確かに悲劇世界深化の契機として、看過されてはならない。が、さらに重要なのは、その幼さによつてもたらされた源氏の苦悩の本質に注目することではないか。不義の罪を犯した宮を憎悪しながら、同時に源氏は、自らの過往の罪を顧ることを忘れない。

故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ。思へば、その世の事こそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけり。(同、二四五頁)

宮の不義を責める前に、まず源氏がしなければならなかったのは、過去の藤壺宮に対して犯した己が不義の罪に頭を垂れて、深く悔悟することであつた。こうして、宮の幼さとは、源氏の「好色」世界における根源的な罪を照射し、その矛盾や破綻を映し出す媒体としてそこにあるのだが、それは単なる媒体ではなく、自身も同じ罪を背負う主体者として存在するものである。

やがて柏木は若い命を死に、宮は出家し、源氏は不義の子薫をわが子として抱いて「宿世」を覗く晩年を迎えることになるが、「若菜」巻を超えてさらにたどられる彼らの悲劇世界の展開部について、他日、稿を改めて考究することにした。

五

前節までの論考の要点をまとめ、そこに可能な結論を得ること、小稿の結びとしたい。

これまで私は、「若菜」巻における女三宮について、六条院への降嫁から柏木との密通に至るまで、とくに贈答歌の場面に注目しながら、考察を進めてきた。見てきたように、数少ない宮の詠歌に、愛を求め、愛に傷ついてひとり嘆く女の切情が、肉声のまま、深々と詠じこめられていた。そして、やや比喩的に述べるなら、宮の細いその肉声は、源氏には聞きとめられることなく、壮大な六条院の殿堂の内部に空しく木霊し、そこをかけぬけ、それを崩壊に至らしめたのであつた。

「若菜」巻において、女三宮に対する源氏の愛は稀薄である。ほとんど無に等しい。こうした疎隔の原因を、源氏は宮の幼稚な人柄に帰せしめようとすが、その詠歌によつて知られる宮像とは、それほど未成熟で空虚なのではなく、たとえば新婚五日目の源氏との贈答においても、歌による愛の高揚と連帯の意識は、彼女にあつてはほとんど十全に成立していたのである。が、そうした贈答世界の成立が新しい愛の現実を切り拓き、それがさらに新たな贈答歌の成立をもたらしという発展性が、ここでの二人の関係においては見られない。そこにはある種の作爲的なもの——つまり、源氏の誤つた思い込み、故意による無視、あるいは作者の物語方法上の意図などが作用しているように、私には思われてならない。

清水好子氏によると、「若菜」両巻の世界とは、究極のところ、「過去の甦り」であり、「光源氏の過去は逆に照し出され、その一生の意味が問い直されている」、「過去の最大の事件である藤壺との密通、冷泉院誕生について問い直す」というのが、この巻の主題であると説明せられる。氏のご高論に学べば、女三宮の登場も、まさ

しく源氏の「過去の甦り」であったこと（源氏は、宮が藤壺の姪であることに心を動かし、結婚した）^(注12)、柏木との密通事件が「時間にして七年の歲月にわたって育れ成就する」^(注13)ことの主題的、方法的意味の重大さが明瞭となる。いま、私自身の課題にひきつけて述べらるなら、六条院に降嫁した宮とは、源氏の「過去の甦り」と「過去の問い直し」の二重存在としての位相にある。両者における愛の關係も、必然的にその位相のもとに生成発展するものとして跡づけられなくてはならない。「若菜」巻の世界が、すべて後半の柏木女三宮密通事件とその露見による、「源氏の過去の問い直し」の主題に収斂すると考えると、前半における宮の降嫁事件もそうした文脈のなかで統一的に捉え直されることになる。

その幼稚な人柄の故に、女三宮は、しばしば否定的な言辭をもって批評されている。「ほとんど独立した性格をもたない、白痴的に明るい世界の住人」^(注14)、「光源氏の色好み人物としての理想性の深化と、紫上の内面深化を形象化するための媒体」^(注15)、「無性格さ、人間的な空虚さ」^(注16)、「虚像性」^(注17)等々。これらは、確かに女三宮像の重要な一面を捉え得て有意義なのではあるが、私見によれば、宮についてのいま一つの重要な側面を欠落させて、論じきまわっていないうらみを残す。宮の内面世界にも注目し、傀儡として存在するのではない、生きた主体者としての存在性を捉え、宮の人物像のトータルな把握を心がけて小論を試みたが、当初の意図がどこまで達成できただかは、もとよりおぼつかない。

女三宮の世界について — 「若菜」巻における贈答歌場面を中心に —

注(1) 今井源衛「女三宮の降嫁」(『文学』昭30・6、「源氏物語の研究」昭37所収)これに対して、石田穰二「若菜巻について」(『国語と国文学』昭30・11)ほかの反論もなされ、論争となった。

注(2) 注(1)の今井論文による。

注(3) 「岷江入楚」

注(4) 時枝誠記「源氏物語の文章と和歌」(『源氏物語講座下巻』東京大学源氏物語研究会編 昭24所収)

注(5) 清水文雄「国文学」(『国語教育科学講座1国語教育科学論』昭33所収)

注(6) 野村精一「好三宮」(『解釈と鑑賞』昭46・5)

注(7) 武者小路辰子「女三の宮像」(『日本文学』昭49・10)

注(8) 注(7)に同じ。

注(9) 森一郎「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」(『国語国文』昭35・11、「源氏物語の方法」昭44所収)、伊藤博「柏木の造型をめぐる」(『国語と国文学』昭42・10)ほか。

注(10) 『日本古典文学全集源氏物語(4)』頭注。

注(11) 清水好子「源氏物語の主題と方法―若菜上・下巻について―」(『源氏物語研究と資料』昭44所収)

注(12) 物語本文に、「この皇女の御母女御こそは、かの宮の御はらからにものしたまひけ。容貌も、さしつきには、いとよしと言はれたまひし人なりしかば(下略)」(『若菜上』(4)三五頁)と叙せられて、源氏の宮に対する好色心の

発動が読みとれよう。

注(13) 注(11)に同じ。

注(14) 注(1)今井論文による。

注(15) 注(9)森論文による。

注(16) 野村精一「若菜巻試論——人間関係の悲劇的構造」について——（『源氏物語の創造』昭44所収）

注(17) 深沢三千男「女三宮をめぐる」——（『源氏物語の形成』第二編第八章、昭47）

なお、本文の引用は『日本古典文学全集源氏物語』（小学館）により、その巻数とページ数を併記した。

（昭61・9）